

地域と共に進める発達支援

仙台市発達障害者支援地域協議会作業部会(中間報告)

1. 委員の構成

氏名		所属・立場(役職)			
1	部会長 佐々木健太郎★	尚絅学院大学	総合人間科学系	教育部門	准教授
2	副部会長 西田 有吾	仙台市自閉症児者相談センター		主任相談員	
3	大友 まゆみ★	学校法人聖和学園	聖和幼稚園	園長	
4	岡崎 愛	NPO法人 アスイク	フリースペースユニットリーダー		
5	加藤 緑	ウェルビー株式会社	ハビー仙台教室	教室長	
6	川嶋 賢治	元 株式会社LITALICO	ライフ事業部コンサルティング部 社会福祉士		
7	佐藤 智美★	社会福祉法人なのはな会 あおぞらホーム	仙台市なかよし学園・仙台市 施設長		
8	佐藤 陽子★	仙台市鶴谷小学校	校長		
9	柴崎 由美子	NPO法人 エイブル・アート・ジャパン		代表理事	
10	田中 由香★	保護者			
11	米倉 尚美★	社会福祉法人みづきの郷	理事長		

※★は協議会員兼務

2. 取組みの経過

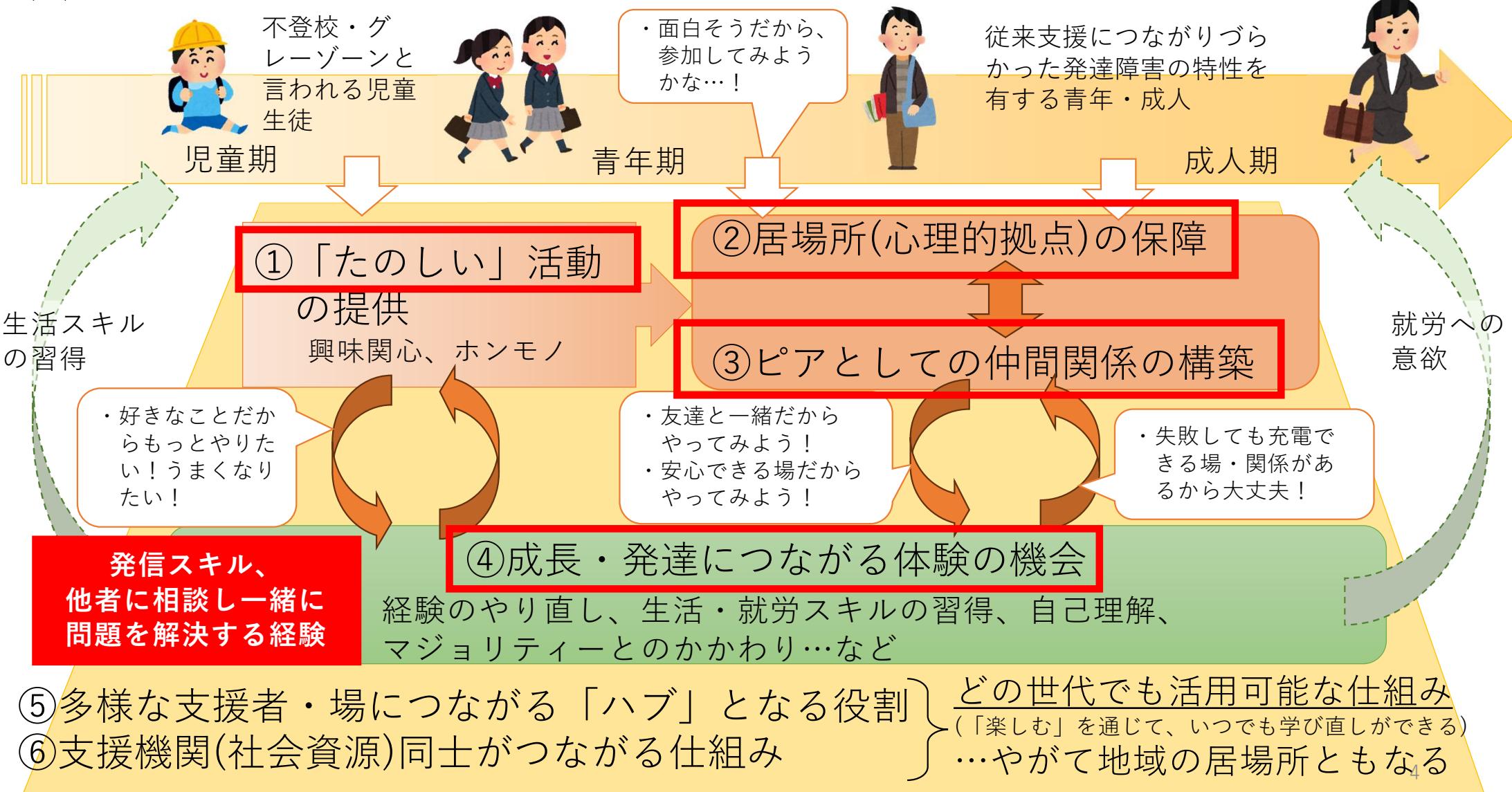
第1回(2025/02/03)

- 将来を見据えて本人支援・保護者支援で大切にすることは何かについて、全ライフステージの視点から、3年をかけて議論を進めることを確認。
- 各委員がそれぞれの現場で大切にしていること、現状や課題を共有。

第2回 (2025/07/01)

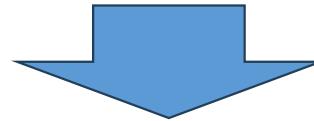
- 将来を見据えた支援の在り方について、「時代とともに変えていくこと」、「これからも大切にしていきたいこと」の2つの観点から「本人支援」と「保護者支援」それぞれについて議論。

(1)本人支援について これからも大切にしたいこと (前クールの成果より)



現在生じている課題

- ・自己理解のための実体験や生活体験の不足。
 - 体験が乏しいと「好き」「嫌い」がわかりにくくなり、働く動機や目的なども持ちにくくなる。
- ・サービスが手厚くなつた一方、地域とのつながりが薄くなつてゐる。
- ・ICTがこどもたちにとって必須のツールとなつてゐるもの、誰が、どのように教えるかが不明確。



これから求められる支援

- ・自己理解、自己決定につながる実体験の保障。
- ・幼児期から「楽しむこと」、「好き」を育む支援。
- ・メディアリテラシー習得のための支援。
- ・障害の有無に関わらず一緒に活動できる地域の場の設定。
- ・学齢期から本人主体で支援を整理する役割。

(2)保護者支援について

これからも大切にしていきたいこと

- ・保護者の「気持ち」や「願い」を支える支援
 - 保護者の課題に合わせた支援。
- ・保護者が葛藤や気持ちを出し合える場、ピアなつながり
 - 悩みながらもこどもと向き合い歩んできた先輩保護者との出会い(従来は、親子通園施設やPTA活動等を通じて保護者同士が出会う機会、時間があった)。
- ・保護者と子どもの信頼関係の構築
 - 子どもの「好き」を保護者も一緒に行って楽しむことや興味を持つことの大切さ(サービスが少なかった分、親子で過ごす時間が十分にあった)。

社会の変化と、それに伴い生じている課題

共働きの一般化



- ・ こどもと向き合う時間の減少
- ・ 親同士がつながる機会の減少
(PTA活動の縮小／不参加)
- ・ ゆるやかな親同士のつながり
のニーズ

情報量の増大



- ・ 情報の取捨選択が困難
- ・ 必要な情報が届いていない
- ・ 情報過多による子育ての失敗
への不安

サービスの拡充



- ・ こどもと向き合う時間の減少(子どもと遊べない)
- ・ 本人にとって本当に必要な支援が何かを見極め
ることの困難

- ・ かかわりを通じて子どもの成長を実感し、親も成長する機会が失われてしまう。
- ・ こども本人が成長する機会を失ってしまう。
- ・ 青年期から成人期への円滑な移行(親離れ)にも影響が生じる可能性がある。

これから求められる支援

- ・子育て支援(保護者の試行錯誤の伴走的なサポート)。
- ・情報だけでなく、本人の立場で、将来を見据えて今必要な事を保護者と一緒に考える支援。
- ・ICTを含めた、子どもの「好き」に保護者が寄り添うための支援。
- ・保護者同士がつながる機会を提供しつつ、自由に参加できる柔軟なコミュニティ。

今後の検討課題

- ・ 情報量が増大し、サービスが拡充する中で、本人・保護者が将来を見据えて最適な選択(情報の取捨選択も含め)ができるようにするための支援のあり方。
- ・ 親子の時間が減少する中で、保護者が親として成長するための支援のあり方。



- ・ 上記の支援を実現するうえで、多様な価値観に基づく多様な立場の支援者が混在する中で、支援者が共有すべき視点。



- ・ その視点に基づき、多様な立場の支援者が各自の強みを活かして本人・保護者を支援していくための連携のあり方。